

資料

イノシシと牛の社会空間行動の観察例

長妻 武宏・小寺 祐二・吉岡 孝

The observation example of the spacing behaviour between
the wild boar (*Sus Scrofa*) and the cows

Takehiro Nagatuma, Yuuji Koderu and Takashi Yoshioka

要 旨

イノシシ放飼場に繁殖用雌牛を3日間入れて、イノシシと牛の位置を5mの区画に記録した。イノシシは牛の威嚇・攻撃に対して、回避して逃走することができる距離を保って行動した。

I はじめに

島根県内では、遊休農地を利用した繁殖雌牛の放牧が行われている。遊休農地の畜産的利用は、イノシシなどの野生獣の生息環境の抑制としても行われている(千田, 2003)。しかし、これまで牛とイノシシの相互行動を直接観察した報告がないことから当センターの飼育イノシシと牛を使って相互の行動を観察した。

II 調査方法

1. 調査対象

調査したイノシシは、島根県中山間地域研究センター内のイノシシ放飼場(図1)に、2003年に捕獲したイノシシ1頭(♂, 体重約50kg)と2004年に捕獲したイノシシ3頭(♂1頭, ♀2頭, 体重いずれも約10kg)であり、いずれも島根県飯石郡赤来町(現:飯南町)塩谷上で捕獲した合計4頭であった。牛は、島根県隠岐郡西ノ島町で生産及び育成された放牧経験のある黒毛和種の雌牛2頭(体重いずれも約450kg)である。牛は試験開始直前に放飼場へ入れ、3日間行動を観察した後、放飼場から出した。

2. 調査方法

2004年9月1日~3日の3日間, 毎日9:10~11:10及び14:00~16:00にイノシシと牛の位置を観察した。両者

の位置を分かり易くするために、放飼場内には約5m間隔で支柱を立てて区画分けした。観察は、放飼場内に隣接し、放飼場全体が見渡せる塔の上からデジタルビデオカメラ1台を使用し、MiniDV80分テープを1.5倍速、約2時間連続で、イノシシと牛の位置が判別できるように撮影した。撮影終了後、テープを再生して升目状(5m×5m)に区画した図に、10分間隔でイノシシと牛の位置を記録し、午前と午後各13回、1日当たり26回の合計78回分を記録して分析した(図2-1, 2-2)。2004年捕獲のイノシシ3頭は、带状または群状となって行動し、3頭が別々の区画にまたがることは一度もなかったため、記録は3頭まとめてひとつとし、iを1個記入した。なお、事故防止のため、A区画には牛が侵入しないように約90cmの高さで電気牧柵(通電せず)を設置して、イノシシの避難場所を設けた。

III 調査結果

調査時の天候は、晴れまたは曇り、降水量なし、最高気温25.7℃、最低気温19.0℃(気象庁赤名アメダスデータ:毎時データ)であった。イノシシがA区画に避難した回数は、データ数78回のうち、40回であり、いずれも2003年捕獲のイノシシであった。イノシシ同士が、同区画又は隣接する区画(3×3の9区画)に位置した回数は、30回であった。牛同士が、同区画又は隣接する区画

に位置した回数は、49回であった。イノシシと牛が隣接する区画に位置した回数は12回であったが、同区画に位置することは無かった。イノシシと牛との間隔は平均3.82区画離れていた。

Ⅳ おわりに

この試験では当初、牛は、イノシシが隣の区画（約5～7.1m）まで近づくと追いかける行動がみられた。イノシシは追いかられると威嚇することなく直ちに逃走した。なお、観察記録中に、イノシシが牛を追い払うた

めの威嚇行動をすることは一度もなかった。イノシシと牛は、平均で19m以上（3.82区画：19.1～27m）の距離を保ち、この距離は相互の行動に干渉しない安定した状態であったと考えられる。

フィールドでの活用方法としてこの距離を縮めない工夫が必要であると考ええる。

引用文献

千田雅之（2003）中国中山間地域を活かす里地の放牧利用. 2pp

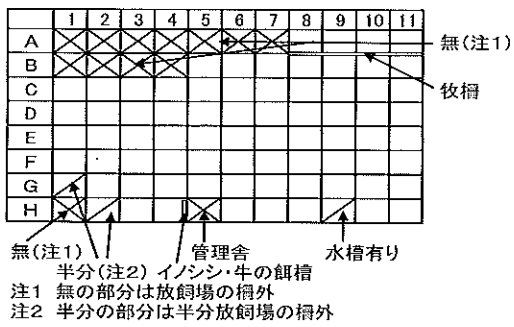


図1 イノシシ放飼場

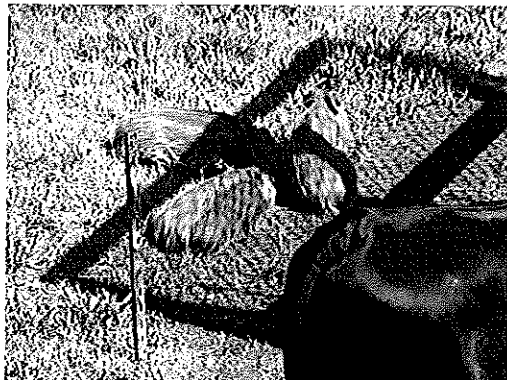


写真1 イノシシ全頭と牛全頭
 写真2 2004年捕獲のイノシシと牛(尻)
 写真3 イノシシ全頭と牛

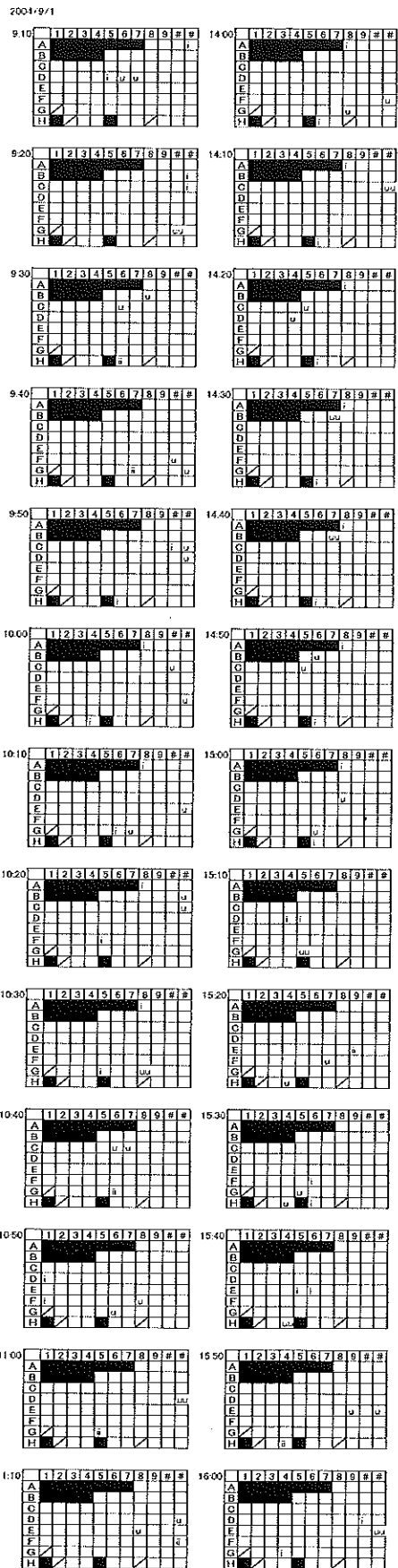


図2-1 イノシシと牛の位置図 (i:イノシシ u:ウシ)

2004/9/2

2004/9/3

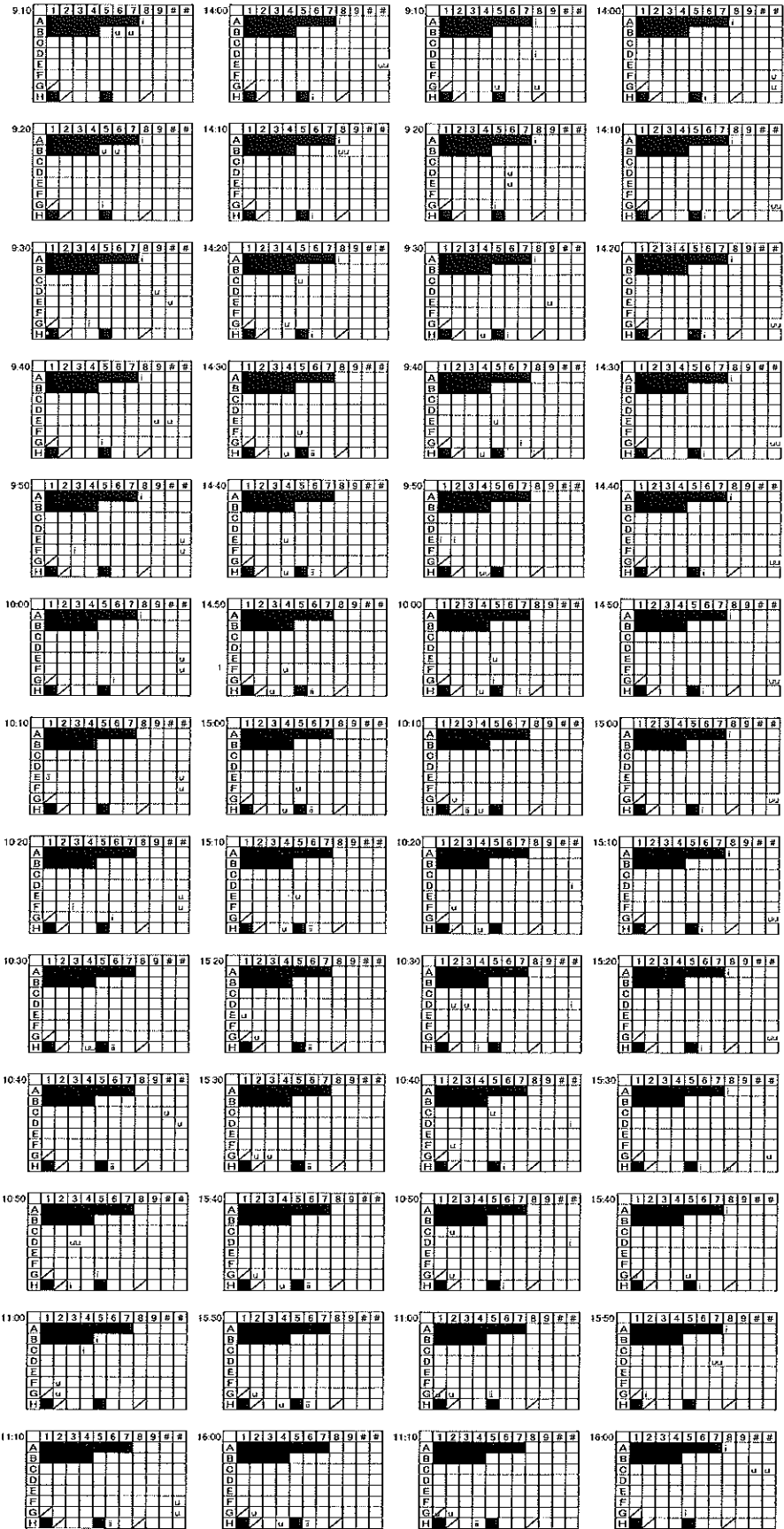


図 2-2 イノシシと牛の位置図 (i:イノシシ u:ウシ)